

「紙創り」を通して、循環型社会に貢献

-環境経営への取り組みの原動力は経営理念-

「泣き笑い」シリーズ第20回目のテーマは“省エネルギー”です。今回取材したのは、昭和3年広島で創業し昭和26年より泉南市で、大型紙袋（セメント袋など）の口縫い用に使用されるクレープ紙などの産業用包装資材のメーカーの山陽製紙(株)の原田六次郎社長です。

山陽製紙(株)の転換期は会社設立50周年を迎えたころでした。主力商品のクレープ紙の需要が年々減少していました。50周年を社員一同で祝った時も、社員の喜ぶ姿を見ながら、将来の展望が開けず苦慮していました。

そこで、原田社長は自社の事業目的を考え直すことから始めます。紙を生産することは社会にとって大切なことであるが、生産するうえで大量の電力と水と重油を消費していました。環境負荷の大きな産業です。これをなんとか軽減することはできないだろうか。また、消費者の意識も“使い捨て”から“リサイクル”へと変化する時期でもありました。この2点から生まれたものが「紙創りを通してお客様と喜びを共有し、環境に配慮した循環型社会に貢献する」という経営理念です。これを実践するための指標になったものが同友会で学んだエコアクション21です。社員が中心となり、平成20年8月に認証を取得しました。そして認証取得と同時期に重油ボイラーをガスボイラーに転換してCO2の削減に挑戦しました。ただ、エコアクション21は取得よりも継続に意義があります。社員みんなに協力してもらうには苦労も伴いましたが、EA21委員会ができ「みんなが協力してやっていきたい」「やる気になる仕組みを作っていこう」としました。社員が器用なのでリフトに乗って設備の修理などをして、役所からお叱りを受けたこともあります。日々自分たちのできることを創意工夫しながら現在に至っています。



山陽製紙(株)
代表取締役
原田六次郎
(かんくう支部)

同友会会員へのメッセージ

製紙業はもともと環境に負荷をかける産業です。紙を造る過程で大量の水とエネルギーを消費するからです。そんな私たちを受け入れてくれる地域社会に謝意を示したい。そんな想いから工場のすぐそばを流れる男里川の清掃活動を10年位前から始めました。マガモ、カルガモ、アオサギ、シロサギなど野鳥が多く訪れる生態系豊かな男里川。社員の一人がHP用の川の写真を撮影しようとしたところ、ゴミの散乱を発見したのがきっかけでした。今では「男里川の自然を守る会」の事務局を当社におき、社員の家族や地域の皆さんと一緒に自然環境を守る活動を積極的に推進しています。また、同友会主催のEA21取得スクールに社員数名と一緒に参加して認証取得しましたが、環境に関する知識をより深める為にエコ検定に全社員で挑戦しています。まだ70%程度の合格率ですが100%全員の合格となるように日々精進を続けています。エコ検定合格者はHPに顔写真を掲載するなど、自覚を促すと共にモチベーションを高め、社員同士が刺激しあい、一人でも多くのエコ検定合格者が出る土壌づくりに励んでいます。また紙づくりも環境活動につなげたい。そんな想いからKAMIDECO（紙でエコ）サービスが生まれました。使用済みのコピー用紙を小ロットで再生して封筒や名刺などにして発生元にお返しするシステムです。「紙はゴミじゃない！」紙は分別して再生することが当たり前の中になる事を目指しています。



「泣」

製紙業では電気とともに水も大量に使用します。泉南市は下水道がまだ100%完備されていません。完備されると、より厳しい水質基準を要求されます。下水道に排水するとなると下水道料金は年間1億円以上になるという試算ができています。そうすると社内の浄化設備をより高度化する必要に迫られます。数億円の設備投資になります。現状から考えると厳しいものではありませんが、環境負荷を軽減することが使命と考える以上、社員とともに創意工夫してチャレンジしてくつもりです。

また、エコアクション21で他社が取り組まれているグリーンカーテンというものがありますが、虫が寄ってくるので製品への混入の可能性もあり、残念ながらわが社では実施できない状況です。



「笑」

「アンダー30」という30歳以下の若手社員の自主活動の中で近隣の男里川にゴミが散乱していることに気づき、清掃活動が始まりました。最初は社員が中心でしたが、それを見ていた地域住民も手伝ってくれるようになりました。今では社員や社員の家族、そして地域住民が一緒になって清掃活動を行っています。地域の自然環境を守ろうという取り組みは、地域住民とつながりを持つようになりました。このような地域住民とともに生きているという社員の意識は、自分も会社も社会にとって役に立っているという“誇り”になっていると思います。



「取材を終えて」

エコアクション21のリーダーが「家でもできることは会社でもする。会社でできることは家でもする」と言われました。当たり前のことなのですが、私には新鮮でとてもとっつきやすい言葉でした。会社と社員の気持ちの根底に共通な思いがあることを表現するものだと思います。だからこそ、取材の最後に「わが社の経営理念はわかりやすい」という言葉ができたのだと思います。環境負荷を何とかしたいという思いから経営理念ができ上がり、それが実践されることにより、社員一人一人が変わり“誇り”をもつようになっていくことに感銘を受けました。